

## 2018年3月4日 礼拝メッセージ

聖書：第一列王記8章1～21節

説教：主は、暗やみの中に住む

### 1 疑問

大きなビルが完成すれば竣工式を行います。川に橋がかかれば渡り初めをしてお祝いします。ソロモンも七年の歳月をかけて神殿を完成させたとき、イスラエルの主だった人々を集め、神殿奉獻式を行いました。8章には、その様子が描かれています。まず主の契約の箱が神殿の中に納められました。そして、ソロモンが人々の前に立って語るのですが、すぐに納得できないことがいくつか出て来ます。今日は二つのことを挙げておきたいと思います。

#### 1) 「主は、暗やみの中に住む」とは？

まず一つ目。13節で彼は、自分が主がとこしえにお住みになる所を確かに建てた、と言って神殿完成を宣言いたします。しかし、そのひとつ前のことばはどう理解したらいいのでしょうか。12節後半です。「主は、暗やみの中に住む、と仰せられました。」神は光の方ではないですか。それなのにどうして暗やみの中に住むのか。その暗やみの場所としてソロモンは神殿を建てたと言っている。これはどういうことなのか。

#### 2) どうしてダビデではなくソロモンが建てるのか？

疑問の二つ目。なぜソロモンが宮を建てることになったのでしょうか。聖書に神殿建設の話が具体的に登場してくるのは、父ダビデがイスラエルの王となって自分の家を建てたときのことです。ダビデは、自分だけが杉材

の立派なところに住み、主の契約の箱が天幕の中に置かれたままであることに心を痛めました。やはり、主のために宮を建てるべきではないのか。そのことを神に伺ったところ、あなたは建ててならないと言われてしまいます。ダビデになにか問題があつて建てる資格がなかったというわけではありません。18節にもあるように神からは「あなたはよくやった」と言われていたのです。それなのにダビデがだめで、その代わりにソロモンが建てることになったのか。それはどうしてなのか。この二つのことを考えていきます。

### 1 神殿奉獻式

#### 1) エタニムの月(レビ記23章39節以降)

式が行われた季節は「エタニムの月、すなわち第七の新月の祭り」のときでした。エタニムの月とは今の暦では9月にあたり、別名「仮庵の祭り」とも呼ばれていて、いまでも伝統的なユダヤ教徒はこの祭りを大切に守っているそうです。「仮庵の祭り」とは何か。そのことはレビ記23章39節以降に詳しく書かれています。イスラエルの民がエジプトを脱出して荒野を旅したときのことです。荒野の旅ですから、移動するたびごとにテントのようなものを作らなければなりません。その大変さは並大抵じゃない。イスラエルの先祖は、そんな苦労の中で救われてきました。しかし後の世代は、時間が経つうちに親の苦労を忘れていく。それが人の常です。そこで神は、毎年定まった季節に仮庵を作り、先祖たちの苦労を追体験させ、からだ

で覚えさせて、信仰の継承をさせることにした。それが仮庵の祭りの始まりでした。この祭りの時期に合わせて神殿奉献式が行われました。

## 2) 契約の箱：モーセが二枚の石の板を置いた

主の契約の箱は、神殿が完成した今、祭司とレビ人たちの手によって神殿の至聖所に運び込まれます。その契約の箱とはなんであつたか。9節に説明があります。「箱の中には、二枚の石の板のほかには何も入っていません。これは、イスラエル人がエジプトの地から出て来たとき、主が彼らと契約を結ばれたときに、モーセがホレブでそこに納めたものである。」

ご存じのように、二枚の石の板には神がモーセに語られた十の戒めが刻まれています。仮庵の祭りも、契約の箱もエジプト脱出と関係しています。そのことを強調するかのようによつて16節でも「わたしの民イスラエルを、エジプトの地から連れ出した日からこのかた」と、繰り返されます。ソロモンは、神殿の完成はイスラエルがエジプトから救われた出来事と切り離せない。いや、むしろ密接につながっていると考へているようです。

## 3) 雲が主の宮に満ちた

ここまでひとつの事件が起きました。祭司たちが契約の箱を神殿の一番奥にある至聖所と呼ばれる部屋に安置して外に出て来たとき、「雲が主の宮に満ち」ました。そのため祭司たちは視界が遮られて、思うように動けなくなります。11節後半。「主の栄光が宮に満ちたからである。」

神殿は主の名のために建てられたもので

すから、完成をお祝いする式の主役は神でなければなりません。ソロモンは脇役に過ぎない。言ってみれば、式場の席に「神さま」という札を貼って席を用意したわけです。でも、本当に神が来られるのかどうか、だれもわからない。それが今、神殿の中から雲がわき起こり、祭司たちが右往左往している光景を見ることになりました。いま自分のすぐ間近に神が御臨在されている。大きな恐れを感じながら、そして祈りながら神の前で語り始めます。

## 2 ソロモンの告白

### 1) 「主は、暗やみの中に住む」

それが12節です。「主は、暗やみの中に住む、と仰せられました。」最初に二つの疑問があるとしました。その疑問の一つがこれです。神は光である方なのにどうして暗やみに住むというのか。調べてみると確かに父ダビデは詩篇18篇11節で語っていました。「主はやみを隠れ家として、回りに置かれた。その仮庵は雨雲の暗やみ、濃い雲。」

ですからソロモンが思いついて言ったのではない。神のご性質として初めから備わっていたことになる。それでもソロモンはこの大事な席で、なぜこのことを持ち出すのでしょうか。

### 2) 神はダビデを選び (16節)

そのことを考へる糸口は、16節にあるように思ひます。「『わたしの民イスラエルを、エジプトの地から連れ出した日からこのかた、わたしはわたしの名を置く宮を建てるために、イスラエルの全部族のうちどの町をも選ばなかつた。わたしはダビデを選び、わたしの民イスラエルの上に立てた。』」

ここで主は、二つのことを言っています。「わたしはどの町をも選ばなかった」、これが一つ。二つ目は、「わたしはダビデを選んだ。」「選ばない」と「選ぶ」、正反対のことが並べてありますが、いったい何を言いたいのでしょう。わかりやすく言い換えてみます。まず前半はこうです。「神は、ご自分の名を置くためにイスラエルの町を選ばなかった。」そして後半。「その代わりに、わたしの民イスラエルの上にダビデを置くために彼を選んだ。」

最初に挙げた二つ目の疑問に、どうしてダビデは神殿を建てることができなかったのか、ということを挙げました。その理由がここで明らかになっていきます。いいでしょうか。神は、まだダビデが若かったときに油を注いでイスラエルの王としました。神殿を建てる者としてダビデが一番ふさわしいということを神も認めるほどのすばらしい信仰者でした。それなのにダビデは、神殿を建ててはならないと言われた。なぜか。神には、ご自分の宮を建てることよりも、もっと大切なことがあったからです。神殿のことよりもイスラエルの民のことが大切だと言う。神は、ご自分のことよりも、罪人である私たちの行く末のことを心配しておられたのです。どれほど心配しているのか。もっともふさわしいと思われていたダビデさえも神殿を建てることを許さなかった、それほど心配していた。そんな言い方ができます。

### 3 暗やみの世に降りてこられた神

#### 1) 天の写しと影

でもすこしへそ曲がりな人は言うでしょう。神殿はいらない、ダビデには建てさせないと言いながら、結局ソロモンが神殿を建て

ることになったではないか。それはどういうことか。前回申し上げました。神殿は何を表しているか。ヘブル書にありました。「天にあるものの写しと影である」(ヘブル 8 章 5 節)

確かに神は私たちに救いがあることをことばで語っていただきましたが、ただことばだけでは済ませなかった。何度も繰り返されているように、イスラエル人がエジプトから脱出した時モーセを通して契約を結ばれ、その証拠として二つの石を入れた契約の箱を作らせました。このようにして、救いが確かであることを目に見えるようにしてくれた。同じように、私たちが迎えられるべく、ことばだけではなく、目に見えるようにしてくれた。聖書の話は夢物語ではない、現実にあることを教えるためにわざわざ、神殿として目に見えるようにしてくれた。それがソロモンが建てた神殿です。

#### 2) 天からキリストが暗やみに下る

その神殿に雲が満ちました。なぜでしょう。一つには最も直接的なことですが、神を直接見た者が死ぬことのないようにとの神の配慮がありました。

もう一つの理由。ソロモンは言っています。「主は、暗やみの中に住む。」暗やみとはいったいこのことでしょうか。ここでは、雲のことを指しているのは確かですが、それだけでしょうか。私たちのこの世界のことでありませんか。人の肉の目で見れば、この世にも光があると思うでしょう。しかし神の目には、この世は暗やみなのです。そんな暗やみの中にイエス・キリストが人となって来てくださり、住んでくださいました。ソロモンが建てた神殿は写しと影に過ぎません。本物の神殿

はどこにあるのか。主のからだこそが本物の神殿であるとイエス自身が教えていただきました。そのみからだは、十字架の上で裂かれ壊されます。しかしこの方は三日目に死人の中からよみがえってくださったとき、地上に本物の神殿が建てられました。人々はそれを目撃しました。そのとき、主がソロモンに語ったことばが成就しました。「あなたがその宮を建ててはならない。あなたの腰から出るあなたの子どもが、わたしの名のために宮を建てる。」

ソロモンは写しと影として石を使って神殿を作りました。そこに雲が満ちました。そのときソロモンは何を見たことになるのでしょうか。ダビデの子孫として来られるイエス・キリストが、暗やみの世に来てくださり、そこに本物の神殿を建てることをはっきりと見たことになります。

ソロモンは告白しました。主は暗やみの中に住まわれます。ならば私たちはどこに主を見ることになるのでしょうか。きれいなところ、美しいところ、明るいところ、ですか。むしろ、汚いところ、目をそむけたくなる場所です。それはどこにあるのか。目を外に向けたら見えるのでしょうか。いいえ、そんな必要はない。私たちのうちを見ることになります。私はしばしば、あれもないし、これもない、と嘆きますが、暗いところならばだれもが持っています。主はそこにおられる。であれば、主は私の所におられない、と言う必要はない。主をいただく資格が十分ににある、ということになります。人知を越えた神の救いの恵みに感謝します。